

青春の一ページ

八期生 浜田 泰行

西高に入って一番早く顔を覚えたのが村田、パン屋のシャツポみたいな帽子をかぶり、単語帳をポケットにしるのばせ、いかにもガリ勉的雰囲気を漂わせた男であった。遠藤は二年か三年の時生徒会長をやったはず、当時の純粹な気持からは、そんな暇があるなら卓球をやればよいではないかと考えた。

久米は一年の二期から編入してきた。そして、驚いた事は小生を入れて四人が一年の同じクラスだった。一学年が八クラスあるのに四人が同じクラス、というのも実に確率が低い話、これもひとつのめぐり合わせかも知れぬ。

四人同じクラスというのは、いい事もあるが悪い事もあつた。丁度久米が編入してきたばかりの一年の秋にアジア選手権が東京であり、荻村先輩が出場するという事で、全員でさぼり、応援に行った。もとよりいささかの罪悪感もなく、当然といった感でさぼったわけだが、一クラスで四人いなくなればそれがいづれも卓球部、これでは学校としてもほうっておけず翌日きついお説教をくつたが、こんなのはクラスが分散していれば学校も気がつかなかったろう。逆に、具合のいい

事もあつた。六期生の内田先輩が又卓球好きで、我々が一心不乱に授業を受けていると廊下から声がかかる、「出てこいよ」四人もいれば誰か一人抜け出て体育館でお相手。とにかく一年、二年は、卓球、卓球で明け暮れた。

我々の時代の試合会場はほとんどが城北体育館、あのドブ川のそばの体育館には、まさしく汗と栄光と屈辱の憶い出が満ちている。当時強かったのは高輪高校、都立一商、日大一高、北野高校等、四シングルス一ダブルスの試合方法で争うわけだが、二年の春の憲法大会を除き上位に入った事はなかつたと思う。この時は、七期生の加々美先輩を中心に比較的まとまったチームが作れ、たしか東京都で三位になったと記憶している。準決勝で高輪高校にやぶれたが、ダブルスで加々美さんと組み、相手方の山本の出すフォアからの変化サーブを小生がミスして加々美さんにえらく叱られたのが妙に頭に残っている。この時は、西高は卓球だけでなく、テニス、水泳等でも上位に入り、総合成績でも都で上位に入ったと記憶している。あの頃の部のノートを見ると、実に真面目に卓球に取り組んでいたことがよくわかる。今から考えれば多少からまわりのなところが目立ち、これが荻村さんみたいな天才と我々凡才の差という事がよくわかる。竹槍的精神論が多く、技術のためにはあまり役に立たぬ熱の入れ方だったのだらう。もっと割り切つて、たかが卓球じゃないか、という事でやれば意外にもっと強くなつたのかも知れない。所詮は運

動であり、頭で考えて勝てるわけもなく、体に覚えこませるか方法がないわけ、この辺にミスジャッジがあったのだから。

こうやって書いていくと次から次へ色々な事を思い出し、実に楽しい。西高というのは、やはり勉強第一の学校であったが、その中で一年、二年と、とにかく卓球の事しか考えず夢中で過ごしたということも、貴重な青春の一ページだったと思う。

おわりになったが、長期にわたりお世話になった藤崎先生、古川先生に感謝するとともに、今後の西高卓球部の一層の発展を期待したい。

部誌より抜粋 昭和二十七年六月十六日（内田）

荻村さん優勝の報に部員諸君の反応は——佐藤君、三浦君、斉木君、僕の四人はラジオを聞いて、その模様を身振り手振りで一生懸命話し合った。「すごかったぞ。スマッシュの連続だった。」「荻村さんもカットに追い込まれたらしいぞ。」等々。沼口君はラジオを聞かなかったのが残念残念。「新聞で見た。聞きたかったな。」ともっぱら僕達の話の聞き役。放課後加藤先生が来て「荻村君が優勝したそうじゃないか。藤崎先生に知らせたかい？ だめじゃないか、真先に知らせなくちゃ。それから祝賀会を開こう。あまり月日のたたないうちにね。」やっぱり大人は大人だけのことはある。

当時の思い出

九期生 内山 公男

当時を振り返ってみると、自分のいたらなさばかりが目につき、恥ずかしい思いでいっぱいです。同期生は、私と森・服部の三名であり、戦績も芳ばしくなく、なるべく忘れようと努めたためか、現在も印象に残っていることが非常に少ないことに、こうして書きながらがっかりしている次第です。

卓球部に入って驚いたことは、「西高の壁」と言われ他校選手に恐れられた浜田先輩のショット戦法でした。当時は、フォアハンドで極力拾いまくる卓球が本流であり、バックハンドの練習は気兼ねなくできなかったという記憶があります。ですから、フォアで処理できないものは、バックハンドでなくショットで返すという型をとらざるを得なく、その意味で浜田先輩に教えられるところは大きかったと思います。この頃の典型的な卓球は、他校の選手の話で申し訳ありませんが、高輪高校の豊巻選手の卓球で、文字どおり「飛燕」の如く右へ左へと走って九割近くフォアハンドで打ち込むのですから、我々に強烈な印象を与えました。

練習は非常にきつく、なかでも、真夏のフットワークの練